

財団だより

多摩川

1996. 12 第72号



イモリ(イモリ科)
腹には朱色の紋がある。水草の
多い池や小さい流れに住む。
10cm。



自然石を配した立川公園「根川緑道」人工噴泉池

■多摩川現風景■

②8 親水公園、親水緑道

最近では全国の川や、湖で「水」と「みどり」を生かした公園づくりを多く見掛けるようになった。はじめは江戸川区の古川親水公園あたりが一般の注目を集めた。荒川、江戸川、新中川とまさに川に浮かんだような江戸川区では、親水公園だけで5つ、親水緑道は16もある。

多摩川でも、農業用水や、旧河川敷、を新しい観点から「環境用水」として見直そうとする動きがある。前者としては、稲城市の大丸用水親水公園、後者としては立川市の立川公園「根川緑道」がそれらの例である。親水公園づくりもいろいろな工夫を用いて地域住民の快適な環境づくりを試みている。ところどころにポケットパーク、四阿などを配置し、流れは変化を持たせ、水生生物がすみやすい構造にしてある。根川の場合、せせらぎの水質についても下水処理水を用いる場合も高度処理に加えて紫外線の透過を行うなど、きわめて良質な水を供給している。

流れの中には鯉、クチボソなど、大丸用水ではマシジミが見受けられ、カルガモ、コサギなどものどかに遊んでいた。環境問題において、住民の意識を改革し、ライフスタイルを変革することが求められている時代となっている。そのためには身の周りの快適な環境(アメニティ)が用意されることが重要ではあるまいか。これからもどんどん親水公園が増えて行くことを心から希望したい。

・関連する財団の研究助成 〈学術研究〉

- ① 多摩川における河川空間の整備に関する基礎的研究
—河川敷の土地利用、利水、治水施設と河川空間の形成—
1978年 篠原 修 東京大学 (No.9)
- ② 多摩川水系の中小都市河川における水辺環境の回復
—水路維持用水としての下水処理水の評価—
1987年 川原 浩 (株)日本水環境学会 (No.99)
- ③ 近世(江戸時代)以降の多摩川流域の下水文化の変遷と考察
1989年 稲場紀久雄 下水文化研究会 (No.119)
- ④ 地域構造の変容と水利システムの再編化に関する研究
—大丸用水、日野用水、府中用水を巡って—
1994年 田畑貞寿 千葉大学 (No.158)

多摩川散歩

■北多摩北部／みずとみどりの探検マップ■

みずとみどり研究会 金子 博

私たちの住んでいる街にはこんな自然が息づいている。そんな発見を体験できたら…。そんなことを思って企画され、約一年間の作業を経てようやく完成(?)したのが『北多摩北部／みずとみどりの探検マップ』です。

東京・多摩地域を中心に、水と緑を生かしたまちづくりを目的として活動を展開している『みずとみどり研究会』の副読本プロジェクト(チーフ;石田幸彦)の呼び掛けに応じて、北多摩地域で活躍されている市民・団体の全面的な協力を得たものです。このマップはまだ「試作品」です。というのも、できるだけ若い人達(中高校生)にこのマップを持って街中を歩いてもらうため、使いやすさ、見やすさなどをどう工夫すればいいのか、そのためのアンケート調査を兼ねたものだからです。

マップには散策路・緑道、川・用水路、公園・緑地、湧水、資料館・博物館を中心に記載しまし

た。表面は北多摩地域の小平市、武蔵村山市、東大和市、東村山市、清瀬市、田無市、保谷市を中心にした地域を、裏面には西多摩地域から町田市に至る丘陵部を加えたより広域的な地域を取り上げました。自治体などが作成するようなよく見掛ける地図は、その行政区域だけを描いたものが一般的です。ところが、自然の地形や川の流れなどは行政区域を越えた広がりを持っています。もし、水と緑の現状を理解するための地図を作ろうとすれば、この行政区域を突破らってしまう必要があります。

この地図を見てオヤっと思う方もいるかもしれませんが。北多摩北部の地域が荒川水系であることがこのマップには示されています。この地域に住んでいらっしゃる市民の中には、てっきり多摩川水系だと思い込んでいる方も少なくないようです。広域的に見ること。それはとても大事なことではないでしょうか。

1000部印刷してすでにほとんどが配布され、いま、アンケートが返送されつつあります。その結果を基にして(資金の用途を立てた上で)修正版を作成し、みなさんに提供できればと考えています。



私と多摩川



あきる野市草花地先の多摩川に群生する
カワラノギク ('96, 11 撮)

明治大学農学部 専任講師 倉本 宣

すっかり色が変わった子どもの頃の写真がときどき目に浮かぶ。1959年に祖父母と日野橋に遊びに行ったときのものだ。丸石河原が広がっている。

私は立川市のはずれで育ったので、多摩川の支流である矢川が遊び場だった。子どもの記憶だから当てにならないが、当時の矢川は今より水が豊かだった。

時が過ぎて大学院に進学した。私の指導教官は研究テーマを与えない主義だった。初めて研究を始める者にとってはテーマを決めることはなかなかむずかしい。何回かの試みの失敗のあとにたどりついたのが多摩川の植生の多様性というテーマだった。

多摩川は都市のなかの自然の帯であり、より自然の残っている地域から都市への生きものの移動の経路である。また、増水という攪乱とその後の植生の再生が繰り返し起こっているダイナミックな自然である。それがおもしろいと思った。

高島平の都立赤塚公園のニリンソウを保全する運動に関わって、公園の管理の仕事に興味を持ち、大学院を中退して伊豆大島の大島公園事務所に勤務するようになってからも、多摩川の調査を続け

た。睦橋上流の植生の経時的な変化を毎月記録していたが、多摩川の河原に来るとなぜか幸せな気分がしたことを思い出す。

そして時はまた過ぎて、1989年にレッドデータブックが発行され、日本でも保全生物学の研究が開始された。多摩川をフィールドとした保全生物学の研究を計画した友人たちの誘いに乗って、再び多摩川を歩くことになった。研究の対象として選んだのはもちろんカワラノギクである。カワラノギクが1970年代から多摩川の河辺植生の保全のシンボルとなっていたからである。

カワラノギクの研究を進めていくうちにカワラノギクが研究の上で取り扱いやすい性質を持っていることが明らかになってきた。例えば、カワラノギクは開花結実すると枯死する一回繁殖型の多年草なので、一つの個体が何回も繁殖する植物よりも取り扱いやすい。また、カワラノギクは永続的な埋土種子集団をつくらない。カワラノギクの個体数の変化を調べるときに土壤中の種子を考慮しなくて済むので調査が容易になる。

今、カワラノギクが激減している。このままではあと十年もするとほとんどみられなくなってしまうことが懸念される。長期的持続的な対策は多摩川の環境を私の写真の時代に戻すことである。しかし、それを待っている間にも減っていくので、短期的対症療法的対策を立てて実行するしかないように思っている。ただし、当座とはいえ、多摩川で進化してきたカワラノギクが受けてきた自然淘汰をなるべく維持しなければならない。また、人間がカワラノギクに対して行ったことはきちんと記録しておくべきである。

倉本さんは当財団の助成研究「多摩川河川敷の固有植物群落構成種の生活史と存続に関する研究」(1994年代表研究者 井上 健 成果No.162)の共同研究者として参加されカワラノギクの研究を分担されました。

本報告書の閲覧を希望の方は当財団にお越し頂ければ貸出いたします。 事務局より

よみがえ

甦れ！多摩川

■ 南浅川を歩く ■

今回は、谷地川、川口川に引き続き「南浅川」を、河口から源流に向かって遡って歩いた。

南浅川は延長8.11kmの一級河川である。裏高尾の小仏川と、高尾山の南西に流れる案内川を合流して八王子市内を北東に流れ浅川本川に流入する。今年9月の東京都環境保全局の発表によると、南浅川の下流端に近い八王子市の横川橋付近のBODは基準値の4倍もあり、都内のワースト一位となった。原因は下水道の普及率の低さと生活雑排水の混入によるものとされている。

浅川の鶴巻橋を300米ほど遡ると南浅川の合流点になる。鴨が数羽のんびりと泳いでいる。右岸の堤内地の一部は芝生になっておりよく手入れがしてある。横川橋にいたる右岸は桜が植えてあり季節には楽しめそうだ。川のあたりはゴミが散乱している。中洲にもビニールの袋が散っている。流木が岸に打ち上げられ、荒涼とした風景である。それでも鴨とカラスが追いかけてこをしている風景は気持ちをはっとさせる。河川敷が広くところどころに周辺の住民の家庭菜園が点在する。

水無瀬橋を過ぎ、南浅川は市街地のなかをゆっくりと流れてゆく。生活雑排水の影響もあり川底は見えるのだが、泥に覆われており、近づくときかなり臭う。五月橋、睦橋と過ぎ東横山橋に至る。コサギが一只、中洲で羽を休めている。コスモスの名残りがあちこちに残っており、冬がだんだんとふかまっていくのを感じる。

この辺まで歩いて強く感じたのは、谷地川、川口川と較べて、南浅川は堤外地（堤防と堤防の間の水の流れる土地）が広く、公園、ゲートボール場、サイクリングロード、とさまざまな施設があり市街地の真ん中を流れている割りには恵まれた空間を持っていることである。今日は、平日の午前中で、天気もあまり良くないのに周辺の住民の方が散歩やジョギングを楽しんでおられる。もうすこし水がきれいになり、ゴミが少なくなり、コンクリートやブ

ロック、アスファルトなどの人工物が少なくなれば、ますますこの川に愛着をおぼえ、自然との触れ合いを楽しむ場になるのではと思った。また、いろいろな植物が混在して面白い風景を演じている。都市公園の整然とした植栽計画による植生よりも雑然とした自然なたたずまいが緩い傾斜の護岸にじっくりあっている。

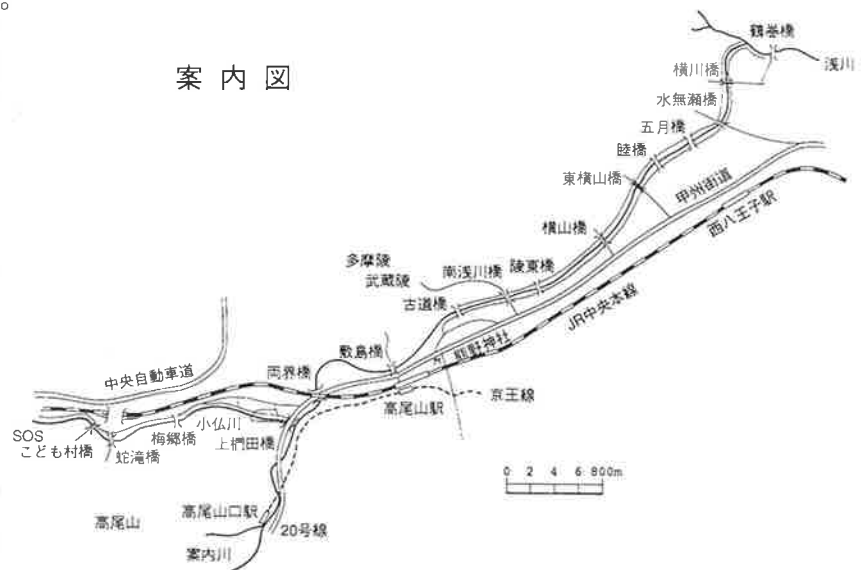
幼稚園生が50人程、保母さんに率いられて鼓笛隊の太鼓をたたきながら堤防の道を行進して行く。ユリカモメが十数羽堰のところにたむろしてそれを見ている。釣りをしている人を右手に見ながら、横山橋、陵東橋を過ぎると、南浅川橋につく。この橋は多摩陵、武蔵陵への入口でもあるので、たいそう立派な造りである。欄干には灯明のはいる楼がついており、クラシックな石造りがけやき並木になかなかよく映えている。

旧鎌倉街道の一部である古道橋を渡る。熊野神社のあたりで川の側道がなくなり、川を離れて国道20号線・甲州街道へ迂回する。

中央本線の高尾駅前敷島橋を寄って、川を覗く。わりときれいな水が茂みのなかを流れている。JR中央本線が甲州街道をまたぐところに両界橋がある。この辺から川がだんだんと高尾山に近づくにつれ深山幽谷に分けいって行く感じが深まる。上栢田橋で案内川と小仏川（南浅川）は分かれて、それぞれ高尾山と裏高尾の麓を上流に向かって行く。小仏川となった南浅川は梅郷橋、蛇滝橋、SOSこども村橋と経るにつれますます細く、深い茂みの中に入って行く。雨足が激しくなり、急ぎ足で帰途についた。

翡翠

案内図



《 “多摩川およびその流域の環境浄化に” 関する調査・試験研究” 募集 》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に329件の研究に対して助成金を交付し、269件の研究成果を得ることが出来ました。

平成9年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- (1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- (2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

◆公募締切日 平成9年1月16日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)

☎ (03)3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究区分	助成件数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度 } 平成元年度	A類	152	178	330	524,798
	B類	81	77	158	83,029
	計	233	255	488	607,827
平成2年度	A類	10	11	21	37,614
	B類	6	5	11	10,666
	計	16	16	32	48,280
平成3年度	A類	8	15	23	32,162
	B類	6	6	12	7,861
	計	14	21	35	40,023
平成4年度	A類	7	14	21	37,394
	B類	5	9	14	10,544
	計	12	23	35	47,938
平成5年度	A類	10	11	21	35,632
	B類	9	7	16	12,118
	計	19	18	37	47,750
平成6年度	A類	5	13	18	31,318
	B類	8	12	20	16,851
	計	13	25	38	48,169
平成7年度	A類	7	10	17	24,705
	B類	4	10	14	13,581
	計	11	20	31	38,286
平成8年度	A類	8	10	18	22,782
	B類	3	7	10	7,668
	計	11	17	28	30,450
合 計	A類	207	262	469	746,405
	B類	122	133	255	162,318
	計	329	395	724	908,723

※A類は学術研究、B類は一般研究

▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

● 「FIELD NOTE No.41～No.52」

発行 WMO (株)野生動物保護管理事務所
「FIELD NOTE」編集部

最近首都圏においても、サル、ツキノワグマ、タヌキ、シカ、などが人里に出て、人家の食料や畑の作物を荒らす現象が頻発している。

折角、丹精こめて栽培した作物をとられる農家

の怒りももっともであるが、餌づけや、ゴミの不適切な管理による人間により食習慣を変えられた野生動物の哀れさも理解せねばなるまい。WMOは野生動物の行動を把握することにより人間との共生を図るための活動をおこなっている。

「FIELD NOTE」はその誌名の示すとおり実際のフィールドワークによる野生動物の行動に関する興味深い調査報告である。

年 4回発行 年会費 ¥2,000.-
連絡先 TEL 044-945-3012

第10回 「多摩川実査」を終えて

10月30日、秋晴れに恵まれて、財団主催による「多摩川現地実査」が行われた。

「ふれあい下水道館」

このところ、流域の博物館も訪ねているが、今年は小平市の「ふれあい下水道館」を訪ねた。下水道という、我々の日常生活に必要な不可欠な施設を扱った、たいへんユニークな博物館である。平成7年10月にオープンして1年経過して、たいへん人気で計画を上回る30,000人を越す来場者を迎えている。普通の博物館のとちがって、1階の入口から、下の階へどんどん下りてゆく。地下5階まで下りると、実際に下水道の中に入る体験ができるようになってきている。展示もいろいろな工夫がされており、楽しみながら下水道を知ることができる。汚泥のなかの微生物を大型モニターで見ながら、解説を聞くことができる。

これからも、テーマ性のあるこのような面白い博物館が沢山できると楽しくなるだろう。

「ふれあい下水道館」をでて、玉川上水のほとりの中央公園で、秋の日を浴びながらお昼の弁当を開いた。風が心地良かった。玉川上水の水は少なかった。

大丸親水公園

昼食後、マイクロバスは府中街道を是政橋を通り、稲城市の大丸親水公園へ向かった。

大丸用水の幹線の用水路をとりいれ、緑道を整備して公園を計画した。大丸用水は江戸時代の元禄年間に遡る歴史を有する用水路である。多摩川から取り入れた水は稲城市内を網の目のようにはりめぐらされた用水を流れている。

総延長1,120mの細長い緑地にはせせらぎが流れている。水流はかなり速く、魚影も見られる。

岸には柳の枯木が繁茂している。「用水路をいかしたまちづくり」を目指して、市の職員の自主研究グループによる検討が重ねられ、住民のアンケート調査による用水路像を求めた。岸壁は施工の時期の違い、住民の意向の違い等を反映して、玉石積みのもの、素掘りのものがそれぞれあり、調整しながらきめ細かい対応をされたことが伺われた。稲城市では公共下水道事業の整備により、水質が改善され、この用水路でマシジミが発見された。今回もマシジミを掘りあげ実際に見せていただいた。公園は東屋や、ポケットパークをとところどころに配置してあり、住民の憩いの場所としても利用されている。

立川公園「根川緑道」

これはアクアパークモデル事業として行ったものである。一級河川の残堀川の旧河川敷を、1,300mを四つのゾーンに分け、それぞれのコンセプトで自然のあふれた川沿いの散策路をつくりあげたものである。水については下水を高度処理したものをもちいた。通常の凝集ろ過、活性炭吸着、に加えて紫外線透過により水質のさらなる向上をはかった。これにより、無色、無臭で水遊びもできるせせらぎが可能となった。魚、水生生物、水生植物、なども良好な環境で生息している。子どもが、歩いている時も、コサギ、カルガモ、鯉、クチボソ、などが随所に見うけられた。萩の花も咲き乱れていた。平成4年から始められたこの事業も十分に周囲になじんできて市民の憩いの場所としてますます大事にされることと思われた。

今回の三つの施設はいずれも、本年度の建設大臣による「いきいき下水道賞」の受賞施設であることを付記いたします。

- ・発行日 平成8年12月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141

*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125

